

九（休養中）

鹿野苑高等女学園の境内にある休養室は、いわゆる学校の保健室にあたる部屋である。しかし一般的な保健室の規模とは大きく違い、最低でも十六人分の布団が用意された大部屋となっている。

これは、ヒュージとの戦いで八部衆全員が負傷した場合、全員を収容できるようにという配慮を反映した設計で、八部衆が二隊以上負傷すれば、その分だけ布団を増やすことで対応も可能だ。

医務所——いわゆる治療室は隣室にあり、そこでは応急処置から検査、ちよつとした手術にまで対応できる設備が揃っており、医師免許を持った優秀な阿闍梨が待機している。

いま休養室の布団に横たわっているのは、ヒュージが仕掛けた同士討ちで負傷した輝礼隊の三人と、焰蘭隊の一条蒼泉だけである。

各負傷者は天井の金具に付けられた特殊な御簾みすによって仕切られている。各自のプライベートな空間を確保するため、そして感染症系の疾病があつた場合、体液に混じつた病原体の飛散などを最小限に抑えるためで、簾すだれの内側には透明の抗菌カーテンが天井から下がっている。

部屋全体が、菌やウイルスの侵入を防ぐために陽圧化されており、また病人や怪我人のために、ガーデン内では数少ない空調が設置されている。翼彩が部屋に入ったときも、ほんのりと暖かかった。

消毒液の匂いと、なんとも言えない生薬と畳の複合的な香り、灸に使う百草の香り、そして線香の残り香が部屋全体に染み付いている。

おそらくそれは、殉職したりリリイを弔ったときの線香の香り。

だから蒼泉は、この部屋を「普段よりも一歩だけ死に近い部屋」と表現したことがある。翼彩にはそれが忘れられなかった。

本当は、負傷したり罹患した人が、一歩も二歩も生に近づく部屋であると信じているから。

「——みずみず——？」

黒焦げになった図鑑を抱えながら、病室へ静かに入り、御簾を開ける。

「起きてる？ みずみず」

「ただだ誰」

あ、ごめんなさいと言い、御簾を閉める。別のリリイだった。

隣の御簾をそつと開ける。

そこには——白い浴衣寝間着を来た蒼泉が布団をかけて、横たわりながら翼彩を見つめていた。

加湿器のミストの悪戯なのか、白い着物が薄ぼんやりと光っているように見えて、まるで傷ついた天女が羽衣を失って弱っているかのよう。

背中に軽い火傷をしており、おそらく膏藥なども貼つてあるのだろうか、仰向けに寝ることができない風合いだつた。火傷の部分に障らないように、自慢の長い後ろ髪は一つ結びにされている。

昼から戦闘中まで一貫して不機嫌だったこともあって、翼彩は蒼泉の顔色のない顔色を窺うかのように、恐る恐る話しかける。

「——みずみず——大丈夫？」

蒼泉は、しつ、と人差し指を口に当てて、すうつと息を吸ってから、翼彩様が無事で、よかったです——と小声でささやいた。

右頬を枕に付けているため、左手しか自由が利かないようだ。

「ごめんね——わたしのせいでこんなことに——」

蒼泉はほんのわずかだけ、首を横に振った。

「翼彩様の手元を見てたら、ヴァジュラが光ってなかったから危ないなって思ってた——」

「いつつも護ってもらってばっかで、本当みずみずがお姉ちゃんみたい。先輩みたい」

先輩は翼彩様です——と言いながら、蒼泉は無表情な上目遣いで翼彩の網膜を見つめた。

——やっと見てくれた。

肩を落としてため息をついたあと、抱えていた本を両手に持つて。

「あと、大事な本も焦がしちゃったんだ——ごめんなさいっ」

キノコと山菜の凶鑑を、そっと蒼泉の目の前に置いて、勢い良く土下座をする。

蒼泉は何事があったのかという表情で、きよんとしている。

あのね——ともじもじしながら、翼彩が頭を起こして小声でささやく。

「——ヴァジュラを使って調理しようとしたら、厨房ふっ飛ばしちゃったの——そのときに」

さすがの蒼泉も眼を真ん丸にして、声にならない声で、えーっ！ と叫んだ。そしてすぐに、痛ッ、と苦悶の表情を見せた。

驚いたときに使った筋肉が、背中の火傷に障ったらしい。

大丈夫？ 大丈夫？ と慌てる翼彩を左手で制して、しばらく落ち着いたあと——翼彩様が無事だったのな

「何も問題ありませんと言った。」

休養室の畳の上に正座した翼彩が、チエツクのスカートの両裾をぎゅうと握る。

「あとね——あとね——」

蒼泉は右肘を突いて上体を起こし、なんでしよう、と小首を傾げる。

またもじもじとしながら、スカートの裾を握りしめる翼彩。

そして、意を決したかのように、薄桃色の唇を開く。

「あの——お昼さ、みずみず怒ってるっていうか——機嫌悪くなかった？ わたし馬鹿だから——何が悪いのか」

言われないとわかんなくって——と真下の畳を見る。

蒼泉は一分ほど黙ったあと——いいんです、と言つて再び布団に潜り込む。

何か小声で言っているようだが、口が布団の中にあり聞き取れない。

「え、みずみずなんて言ったの？」

——わかってくれないうです——。

「ごめん、お布団で聞こえない。もう一度言つて」

蒼泉は一呼吸置いたあと、布団を捲つて口を出して。

言つてもわかつてくれないうです——と、震える声でつぶやいた。

その眼は充血していて、今にも涙が零れそうだった。

わかるようにするから、聞かせて、お願い——と、翼彩も蒼泉の網膜の奥を見つめた。

蒼泉は、何かを振りしぼるように唇を震わせて。

「翼彩様が、円覚さん大好きって言うたから——言うたから——」

そうつぶやいた。

翼彩は、えっ——、と声にならない声を発したあと、蒼泉が続ける。

「——会話の流れとか勢いで言うたのはわかってるけど——そういう意味で言うたんやないことはわかってるけど——」

「あつ、そういう大好きじゃなくって——」

翼彩は、なんとか弁解しようとするが、自分でも何を言いたいのかが組み立てられない。

脳の言語野をフル回転させているとき、ふと思考が止まった。

あ——そうじゃない。

——わかってないのはわたしなんだ。

みずみずの『大好き』って——。

翼彩の頬と耳が、ぱあつと発熱するのを感じた。

「私、翼彩様しかおらんから——」

「みずみず——」

蒼泉の布団の隙間から、こんもりと湿気を帯びた温かい空気が漏れる。泣いて体温が上がり、汗ばんでしまったのだろうか。

「年賀状も、年賀状も——少数とか嘘やから、ほんまは翼彩様しか出す人おらんから——」
言葉を返せなかった。

わたし、なんて鈍かったんだろう。

蒼泉は震える指で翼彩の右手を握った。でも、翼彩は心臓が握られた気持ちになつた。

「——翼彩様は、いろんな人と、仲良く、できるし、ヒュージとの戦いの前には、こんなこと——どうだつて、いいことやないですか——でも、私には」

翼彩様だけやから——と言いながら、蒼泉は耳と鼻を真つ赤にしてぼろぼろと涙を流した。

涙の粒が蒼泉の頬から次々と枕に染みこみ、繊維の中に消えていく。

「だから、もう他の人に大好きとか、言わんといて——」

蒼泉が布団を大きく捲つて白い浴衣寝間着の姿を見せた。

こぼれそうな瞳の光を潤ませながら、翼彩の網膜の奥の奥まで見つめる。

そして、布団から上半身を乗り出して、正座をする翼彩の膝に顔を埋め、スカートをがっしりと掴む。

「わがままなのは、わかつてますから——やきもちなのは、わかつてますから」

ひい、ひい、と喉を震わせ、右手を握りしめて、左こぶしで弱々しく翼彩の太股を叩いて抗議する。

翼彩は、自分の呼吸が震えていることに気づく。

——なんだろう、この湧き上がる気持ち。

——凄く。みずみずの大好きを。凄く、凄く受け止めたい。

——誰に止められても、羽根で包みこむように、みずみずの気持ちを抱きしめたい。

握つた掌底で自分の脛をこする。

自分の頬にも、涙がつたつていた。

翼彩は、震える息を大きく吸つて。

「どうだつていいことだなんて思わないよ。っーも、っーもね——みずみずが大切だから」

そうささやいた。

蒼泉は顔を埋めたまま、こくりこくりと頷いた。

「もう言わない——大好きは、次からみずみずだけに使う言葉ね」

翼彩はそう言つて、涙をすすりながら蒼泉の不思議な色の髪をゆつくりと撫でた。

蒼泉はうつ伏せから横向きに姿勢を直して、それでも翼彩の膝に顔を載せたまま、無表情でまたこくりと頷いた。

目周りや頬、鼻は紅潮していたけれど。

この無表情は、気が晴れたときのような無表情だ。

少しだけくたびれたので、翼彩は膝に蒼泉を載せたまま、その天女の頭ごと両手で包み込んで覆いかぶさり——まどろ微睡んだ。

二十度に設定された暖かな室温のなかで、二人はゆつたりとした時間を過ごした。

いま、いい時間だよね——と翼彩はささやいた。

膝枕の蒼泉は、はい——とだけ言った。

翼彩は頭を上げて、蒼泉の顔を見た。

安堵しきつたような無表情に見えた。

翼彩はくすりと笑つてしまった。

蒼泉の笑顔が無表情過ぎて、愛おしかつたから。

翼彩は、蒼泉の頭をよいしょと枕に戻して。

じゃあ、遣り残したことがあるから——と言って、立ち上がった。もう行っちゃうんですか——という蒼泉に、寂しそうに頷いた。

「は——」

翼彩が言葉を言いかけて、途中で止める。

「は？」

蒼泉が、途切れた言葉の続きを聞く。

は、早くよくなってね——と笑顔を見せて、翼彩は御簾をそつと降ろして、休養室を出て行った。『破門になった』なんて、言えなかった。

(続)

九(休養中)PDF版

発行日 2018年3月14日

著者 DOGMASK
<https://www.pixiv.net/member.php?id=873859>

連絡先 <http://dogmask.blog129.fc2.com/>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
